

堀口捨己の言説における 「田園的なもの」をめぐる諸概念について

窪田 光佑*・河田 智成**

(平成30年11月1日受付)

On the concepts about “garden” in articles by Sutemi Horiguchi

Kosuke KUBOTA and Tomonari KAWATA

(Received Nov. 1, 2018)

Abstract

The purpose of this paper is to examine Sutemi Horiguchi's concepts about “garden” in “the non-urban in architecture”. In doing so, his ideas of dwellings will be clarified. Horiguchi aims for a dwelling which is equipped with “facility” suited to modern life and people feel an “attachment” for. However, “facility” and “attachment” are exact opposite to each other. Negativity of materials, such as fragility, returns people's lives back to the essence and connects both of “facility”, “attachment”. Horiguchi adopts negativity of materials in dwellings. In doing so, he makes three contradicting concepts coexist: “flammable” material, “facility”, and “attachment”.

Key Words: urban, non-urban, garden, material, desire, facility

1. 序

堀口捨己(1895-1984)は、日本の伝統建築から近代建築を模索した建築家であり、建築史家・造園家・庭園史家・歌人としても知られる。本研究では、1927年に執筆された「建築の非都市的なものについて」を対象とし、「田園的なもの」をめぐる諸概念に着目する。「建築の非都市的なものについて」は9頁で、構成としては「都市的なもの」、「非都市的なもの」、「都市的なもの」と「非都市的なもの」の比較、の順になっており、本稿もそれに従って書き進めていく。キーワードとして「都市的なもの」、「非都市的なもの」、「田園的なもの」、「材料」が挙げられる。「都市的なもの」とは、機械や化学を用い現代の生活の利便性を追求するものである。また「都市的なもの」の対照的なものとして、「非都市的なもの」が挙げられる。「非都市的なもの」は「田園」の中に含まれることが多い。そこで「田園」は重要概念と考えられる。これらの概念の傾向は住宅建築に

ついてみられると述べている。

堀口は1895年に生まれ、1920年に東京帝国大学を卒業し、その年に山田守、森田慶一ら六人と共に分離派建築会を発足する。分離派建築会は、当時の東京帝国大学の建築学科や建築学会で強まりつつあった工学重視の傾向に反発した。その宣言の中に「我々は起つ。過去建築圏より分離し、總の建築をして真に意義あらしめる新建築圏を創造せんがために。」¹⁾と示されている。これは建築の芸術性を主張した、日本で初めての近代建築運動となった。1923年にヨーロッパへ留学しバルテノンを訪れた際、「冷たくきびしく寄りつくすべもない美しさの中に、打ちのめされて、柄にあう道を探さざるを得なかったのである。」²⁾と記している。堀口は感銘を受けながらも挫折を味わい、建築思考が展開した。「建築における非都市的なもの」は1927年に出版され、ヨーロッパ留学以後に執筆された。分離派建築会発足時の工学重視の否定から出発した思想は、ヨーロッパ留学を経て以前とは異なった建築思考が展開されていると考えられる。

* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻博士前期課程

** 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

本稿では、「田園的なもの」をめぐる諸概念をもとに、「都市的なもの」と「非都市的なもの」の関係に注目して、近代の都市における住まいについて明らかにする。

2. 「都市的なもの」について

近代の都市生活を送る中での問題から分析を行う。

しかるに近代の科学と工場の産業からあらわれた多角な騒擾な都市生活は、必要以上の競争的興奮と疲労とを課して、官能的な末梢的な強い刺激の多いあわただしさ、いらいらした繁雑さであって、その個々の生活の集積した一大都市の生活はその和よりも一層加速度的に拡大されて、住宅とは何か、どうした要求から作られたかを、自然のままに考える暇もなく、まず多数の当面火急の問題に包囲されてしまうのである。

[HKH: 13]

ここで言う「都市生活」とは、科学や産業によって生活を加速させ肉体的だけでなく、精神的にも必要以上の疲労を感じさせる。生活が追い込まれることで、目の前の課題で手一杯になり、住宅の本質が見失われている。また「都市生活」は、「個々の生活の集積」と語られていることから、単なる生活の集合として捉えており、人間を疎かにしていると言える。

次に人間を疎かにした生活の要因を語る言説をみていく。

われわれの生活的本能の妥当な充足のための諸設備は、われわれの地上の一個の人間から出発しないで、集団的な人為的な人間生活上の諸種の約束から出発して、人工的に誇張された経済的な制約の極端なる陰影の下に計画されるのである。[HKH: 13]

「設備」は、地に足のついた生活している個人の人間ではなく、人為的に集団から造り上げられた人造人間をもとに計画されている。つまり「設備」は人間の生活を豊かにしようとしているが、かえって人間の生活を疎かにしている。

さらに設備について語る言説を詳しくみていく。

しかしこの浪漫性が田園の住宅となって、近代的な衛生設備やその他工業的に作られた便利を充分に取入れて、近代生活の種々なる形式と相当に調和して、時代錯誤に陥らない妥当な手法と材料とであられるならば、それが近代的な中心である都市的でないがゆえに注意をひかないにしても、十分に現代に意義あるもの一つとなるであろう。[HKH: 14]

堀口は設備や工業的なものは、現代の住宅の中に取り入れてもいいと述べている。しかし単に新しいものを取り入れればいいわけではなく、現代の生活に合うように手法や材料を工夫しなければならない。つまり設備は、利用する生活者の生活様式や、利便性を考慮した上で取り入れる必要がある。

ここで人間ではなく、人為的に作られた人造人間について述べられている言説についてみていく。

これは少なくとも近代文明のもたらした都市主義が、われわれの生活全般を、その集合生活のゆえに意志的に理智的に計画するために一層人為的に規格統一的に機械化し、科学化し、極限としては人造人間の生活化しようとする傾向と反対の感情を、単なる反動としてではなく本質的な傾向として、多くの人々に持たせる。

[HKH: 13]

「人造人間の生活」になってしまう理由として、機械や科学を用いて人為的に計画していることが挙げられる。生活を合理的に考え、人間の感情を排してとらえようとしているところがみられる。よって多くの人々の感情を拘束することで反対の感情を持つようになり、かえって生活の本質に気付くと述べられている。

つまり「設備」は、現代の生活に快適性をもたらす必要なものである。それは科学や機械によって最先端を追求しており、人造人間をもとに計画されている。即ち快適性によって人造人間的に人間の生活を豊かにしようとするほど、人間の生活から遠ざかっていると言える。

3. 「非都市的なもの」について

次に「非都市的なもの」をもつ「田園」を探りたい。まずは「住宅」をめぐる言説をみていこう。

すなわち住家は雨露を防ぐために、休息のために、睡眠のために、食事のために、育児のために、保養のために、等々の人間の欲求があるがままに充たされるための設備として考えられるのである。[HKH: 13]

たとえば電気やガスに慣らされた都会から、たまに郊外に出て林の中のたき火に出会うとき、煙が樹間にこもり、赤い炎が木の葉の香と共に昇るのを見て、思わず喜ばしい美しさに心躍ることがある。この原始的な驚きを持った喜びは決して都会では得られないもので、このごとき喜びをもって自然な環境に包まれて生活する家なのである。[HKH: 13]

そうした生活を充たす家がまたそうした生活と調和した家が、もっとも都市的なものに対して最も非都市的なものの対立が考えられるその非都市的なものの最もよき一面を代表するものである。[HKH: 13]

堀口は「住宅」を、雨風しのぐシェルターとしての役割だけでなく、「休息のために」、「育児のために」と人間の欲求を満たすものであると語っている。また「自然な環境に包まれて生活する家」は、「電気やガスに慣らされた」都市の生活にはない特徴をもっている。それは、潜在的な驚きと喜びを含めて成立していることである。つまり生活者と「住宅」が、共存している。このように「住宅」と生活が調和した「住宅」が、「非都市的なもの」を代表している。

次に住宅の材料に着目して言説をみていく。

燃えやすい腐れやすい草、木、壊れやすい脆い土、破れやすい薄い紙など、恒久的でない材料が建築材料として使用されるのは、しかし自然の脅威や外敵侵入に備える守りとしての建築においては行われ難く、ただ安らかな静かな休息や楽しい穏やかな生長の自然に恵まれている家庭においてである。(中略)この根本的な動機を現代においては十分に諸種の材料が自由で、他のもので、より経済的に、より耐久に、満たされるにかかわらずなおそれ等の材料は愛せずにはおられないものである。[HKH: 19]

その材料それ自身もつ性質である。それ等は環境たる自然とそれだけで融合し調和するし、またそれ自身柔らかで、刺激なく、特に厚い茅の屋根のごとく多くの気孔の重なったものの円やかなふくよかさは、何物にも換え難い感じで、なお近代的な感覚にも、たとえばビードロの持つごとき不思議なファクトラを与えるところに愛着がある。[HKH: 19]

現代の技術では鉄やコンクリートやガラスなど経済的、耐久的材料を自由に選べる時代となっている。ここで注目したいのは、人間が「燃えやすい」、「腐れやすい」、「恒久的でない」材料に魅了されていることである。これらの材料はその性質によって自然と調和し、なんとも言い難い感覚で愛着を持たせる。その性質とは、人間の心情と結びつきやすいものであると思われる。

さらに自然と住宅の関係性について追及していく。

しかしその危険にかかわらず現今においても英国やオランダの田舎や田園都市に近代的な住宅として茅屋が可成りに行なわれているのを見ると、それ等の持つ

感じやあたりの自然と調和するということが、それは平凡な日常生活のそことなき心宜しさに過ぎないであろうが、いかに住いというものには大きく評価されるかを知るのである。[HKH: 19]

引用文の前半では、イギリスやオランダで茅葺き屋根の住宅が多くみられ、田舎や田園都市の周辺環境と調和していると述べている。後半については自然と調和し生活に安らぎを与えると語り、住宅の材料に着目したときについて述べていよう。このような素材を利用するのは、日本の伝統というわけではなく、人間が安らぎを求めているからである。ここで注目したいのは、生活ではなく「住い」と語っているところである。「住い」というと生活だけでなく生活者、住宅も含まれることになる。つまり、住宅において安らぎは生活者の根底的な欲求のため重要である。

次に日本の住宅の特徴である「床の間」について語る言説をみていく。

鑑賞の生活は傑れた絵画であっても常住に目前に掲げられることを規定するとき制約には耐えられない生活である。春や夏や秋や冬や、あるいは喜びに充ちた時や憂いに沈んだ時やその他種種なる環境によって、それぞれ色調や、様式や心持の異った芸術を要求する生活である。[HKH: 17]

これと同じ考えを建築から出発するとき絵画や彫刻に対して遂に床の間となるのである。それは絵画に額縁があるごとく室に対しての特殊な空間で、そしてその内に入れる芸術品の自由なる世界を室から及ぼす影響から緩和させ独立せしめると同時に、その絵画から室に波及する空気を、その特殊な空間で限るのである。[HKH: 17]

「鑑賞の生活」とは、四季の変化やその時の心情によって変化することから、制約によって縛られることには耐えられない。そこで日本の住宅には「床の間」があり、絵画や彫刻等の独立した世界を切り離しながら、繋いでいる。よって作品の独立した世界を大切にするとともに、心情や環境の変化対応できるようになっている。つまり日本人は心情や環境の変化を重視しており、人間の心情と住宅が密接に結びついている。

ここでは人間の心情と住宅の関係を詳しくみていく。

そのために単にわれわれの生活が科学的に保証され、温度通風等の調節が適当であり、都市的なあらゆる便利や美があったとしても、その生活より、より科学的

に不完全な不便な、原始的な、素朴な、自然な田園生活を恋うる心情は止み難い否定し難いものである。(中略) 要するにこれはすべての不可避の地上的な法則に従う性情が人間の心の中に深く宿り、自然愛慕の浪漫性をつくり出すのである。[HKH: 13, 14]

ここでは、都市的で便利な住宅より田園生活に「恋いうる心情」である「愛着」を持つことが語られている。この「愛着」は、「燃えやすい」、「腐れやすい」などの「不可避の地上的な法則」により、人間の潜在的な「浪漫」を引き出したものである。つまり人間の情的なものと同鳴し、根底的な欲求が表れた。

以上より、「燃えやすい」材料を用いた住宅が、自然と調和し安らぎを与えることで、「愛着」という心情が引き出されると考えられる。つまり「燃えやすい」材料は、人間を媒介にし、人間の根底的な欲求である「愛着」と結びつく。

4. 「都市的なもの」と「非都市的なもの」の比較について

堀口の捉える「都市的なもの」と「非都市的なもの」について着目し、それぞれの特徴を明らかにすることを試みてきた。この2つの概念は対立していると思われるが、これらを調和した住宅が堀口の目指した住宅であると言える。それが伺える言説をみていく。

前に述べたごとくもちろん電気やガスその他諸種の近代的な機械的な便利は利用されるであろう。それらの利用とこのごとき生活とが実際に矛盾するとは考えられないから。そうした便利や経済を全然排しなければ田園の自然と調和はでき難いという思想ももちろん十分に思弁的な根拠を持っているが、しかしそれは現代に行われるにはあまりに物好きな遊戯か、あるいは世を捨てた、あるいは世にすねた、あるいは特殊なそのごとき興味を利用する物ぐさな生活として今ここに考える必要はないであろう。今はただ現代の価値多い田園生活を考えればよいであろう。[HKH: 13]

ここで語られる生活は、「現代人の現代の価値多い田園生活」のことである。この生活を詳しくみると、「電気やガス」、「機械的な便利」である「都市的なもの」と、「田園」に包含される「非都市的なもの」が共存している。つまり堀口は「田園生活」の中に、「近代的な機械的な便利」を取り入れ、現代に合う生活を目指していたことが明らかとなった。

この章では、「都市的なもの」と「非都市的なもの」について比較していく。特に「設備」や「燃えやすい」材料の、

物からもたらされる効用性と、「愛着」や「喜び」などの、ものと心情が結びついた身体的なものに着目する。

はじめに、ものからもたらされる効用性についてみていく。「都市的なもの」については、文明とともに発展し、現代において快適に生活するための「設備」、「機械」、「科学」が挙げられる。これらは人為的に造りあげられた人造人間をもとに計画されている。よって「設備」や「科学」は最先端の技術によって快適性を追求しようとするほど、人間の生活から遠ざかっている。

それに対し「非都市的なもの」では、「燃えやすい」、「腐れやすい」材料が挙げられる。「燃えやすい」、「腐れやすい」材料を、外敵侵入から守る建築材料の観点からみると、経済的、耐久的に劣る。しかしその材料の性質により、自然と調和し生活に安らぎを与える。つまり、生活の根源的な欲求である安らぎを住宅の中に取り入れようとしている。両者を比較してみると、最先端を人造人間から追求するものと、最先端を否定するように生活の中に安らぎを求めるもののように、相反すると言えるであろう。

次に身体的なものについてみていく。「非都市的なもの」には、「愛着」や「喜び」といった、身体的なものがある。住宅をもととして捉えるのではなく、生活者と住宅が一体となっていると捉えている。ここから、環境や心情によって生活が変化する生活者と住宅が、密接に関係していることが言える。

ここで「都市的なもの」についてみていく。「都市的なもの」は、「集団的な人為的な人間生活」、「個々の生活の集積した一大都市の生活」、個ではなく集団として捉えようとしている。そのときに、集団の個を「一個の人間から出発しないで」、「人為的に規格統一的に」、一様にみている。つまり「都市的なもの」は、人間集団を「規格統一的に」捉えることで、身体的なものが消失する。即ち「非都市的なもの」は、個人の心情に影響を受けることで、身体的なものと密接に結びついているが、「都市的なもの」は人間集団になることで、身体的なものが消失すると考えられる。

最後に堀口の目指す住宅についてみていく。堀口の目指す住宅は、「愛着」のある身体的なものであると同時に、現代の生活に合うように変化する「設備」を取り入れなければならないと述べている。しかし、人間の根源的な欲求を重視する「愛着」と、科学を用いて最先端を追求する「設備」では、身体と物のように志向が正反対である。ここで再度言説を引き、諸概念の関係性についてみてみる。

そのために単にわれわれの生活が科学的に保証され、温度通風等の調節が適当であり、都市的なあらゆる便利や美があったとしても、その生活より、より科学的に不完全な不便な、原始的な、素朴な、自然な田園生

活を恋うる心情は止み難い否定し難いものである。(中略) 要するにこれはすべての不可避の地上的な法則に従う性情が人間の心の中に深く宿り、自然愛慕の浪漫性をつくり出すのである。[HKH: 13, 14]

この言説より、人間は「不完全な」、「原始的な」なものに「愛着」を持ち、これは生活の潜在的な欲求であると言えるだろう。また2章では、現代の生活には「設備」が必要であると述べた。ところが先端性の「設備」と根源性の欲求である「愛着」は、物と身体のように志向が正反対である。しかし、「愛着」、「設備」、「燃えやすい」材料の三者は、はかなさといった材料の否定性によって、人間の生活の本質に立ち返らせることで結びつく。住まいは、3つの概念を共存させることで成立する。堀口の目指す住宅は、「設備」が欠けた、単なる山家風や、世を捨てたようなものではない。同様に「燃えやすい」材料や、「愛着」の欠けた、人造人間のための住宅とも違う。よって、3つの概念が矛盾しながらも、共存するような住宅が堀口の理想と考えられる。

つまり堀口は、「燃えやすい」材料という材料の否定性を住まいの中に取り入れることで、「愛着」、「設備」、「燃えやすい」材料の3つの概念を矛盾しながら共存させている。(図1)

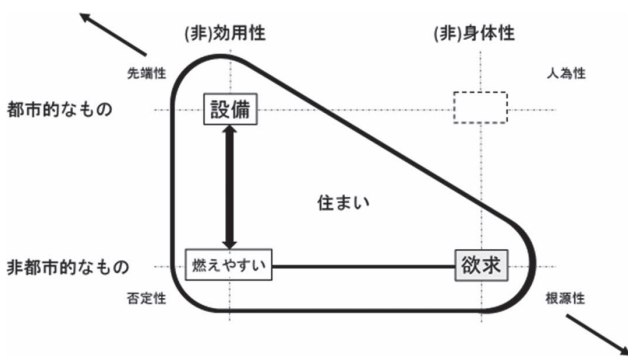


図1 「田園的なもの」をめぐる諸概念の構造

5. 結

以上、堀口の「田園的なもの」をめぐる諸概念について、「建築の非都市的なものについて」からみてきた。堀口の目指す住宅とは、現代の生活に合う「設備」を必要とし、「愛着」の持てる住宅と考えられる。しかし「設備」と「愛着」は、人間と物のように志向が正反対である。はかなさといった材料の否定性によって、人間の生活の本質に立ち返らせ、「愛着」、「設備」、「燃えやすい」材料の三者は、結びつく。つまり堀口は、「燃えやすい」材料という材料の否定性を住宅の中に取り入れることで、「愛着」、「設備」、「燃えやすい」材料の三者を矛盾しながら共存させていると考えられる。

堀口は「田園なもの」をめぐる諸概念を構築するだけでなく、1926年に竣工された紫烟荘でそれを実践した。幾何学的な開口部や水平に伸びた屋根は、「都市的なもの」を表す。また茅葺屋根は、「愛着」を持たせるような「燃えやすい」材料となっている。紫烟荘は、「田園的なもの」をめぐる諸概念を基盤にし、それを表現している。しかし紫烟荘を建築としてみた時に、概念が物として直接的表れ、概念同士の矛盾も表現されている。即ち紫烟荘は、堀口の歩みを示唆させるものと言える。またこの試みは、概念や建築に関しても発展途上であったと言える。単なる材料の否定性が深まることで、物を対象とした概念とは違った「わび」、「さび」といった思想へと発展した。

注

注における堀口の言説の下記文献への参照は、次の文献略記号と頁数によって、直接注に組み入れて示す。

HKH：堀口捨己「建築の非都市的なものについて」『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島出版会、1978年、12-20頁。

- 1) 堀口捨己『叢書・近代日本のデザイン 25分離派建築会宣言と作品』ゆまに書房、2009年、13頁。
- 2) 堀口捨己「現代建築と数寄屋について」『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島出版会、1978年、20頁。